

かやぶき屋根、かまど、大黒柱…。古い日本家屋が減り続ける一方、保存より活用に重点を置く取り組みが広がっている。その暮らしには、現代社会が失いつつある地域社会のきずなの重要性もみえてくる。

(水野拓昌)

古民家 保存より再生

東京都世田谷区。東急世田谷線の2両電車がゆっくり走る住宅街の一角に20~40代の男女7人が住む築150年の古民家がある。それぞれ個室を持ちながら台所や風呂、トイレを共用している。20畳の大広間があり、縁側に面した庭も広い。「松陰コモンズ」と名付けられたコレクティブハウス(共同住宅)だ。

個室は昭和以降増築した比較的新しい部分だが、大広間などは日本家屋らしい貴様がある。昨年4月から住んでいる公務員、奥山竜一さん(32)は「大黒柱は関東大震災で少し傾いたと聞きました」と話す。冬はすきま風が冷たいが、不便さも受け入れて暮らす。

庭では、住人が友人を呼んでバーベキューをやることも。「その中に気軽に入っていける」と奥山さん。独立した生活の中に、自然な『ご近所付き合い』がある。

コレクティブハウスとは、集合住宅に住戸とは別に共用空間を作り、暮らす形式だ。同住宅を運営しているNPO法人「コレクティブハウジング社」(千代田区)の狩野三枝さん(42)は「一人一人が孤立して隣の顔も知らない都会の暮らししか当たり前のようにになっているが、地域の中で役割を持って生活していくことに楽しさ、豊かさがある」と強調する。古い家の保

存ではなく、小さなコミュニティーから地域のネットワークを広げていく提案だ。

【問】 03・5281・2310。

NPO法人「日本民家再生リサイクル協会」(千代田区)は住み替えなどで古い家を提供したい人と利用希望者を結ぶ同協会が作った民家バンクを通して民家の再利用を進めている。「壊され放置される民家を1棟ずつでも再生したい。住み続けるため一部改築することもある」と金井透事務局長(40)。

民家バンクで約70棟を再生。築70~100年の家屋が中心だが、埼玉県川越市では築200年の伝統的な農家造りの構えを残し4世代家族が暮らす家に再生した。千葉県茂原市では築100年の新潟の民家を移築、家族が囲むいろいろがある。東京都調布市では築120年の米蔵をイベント空間として移築再

生した例も。

「新築の場合でも日本の伝統的技法は見直されている」と金井さん。障子は光を柔らかく通し、深い軒は夏には陰となって涼しく、冬は低い角度の日差しが入る。

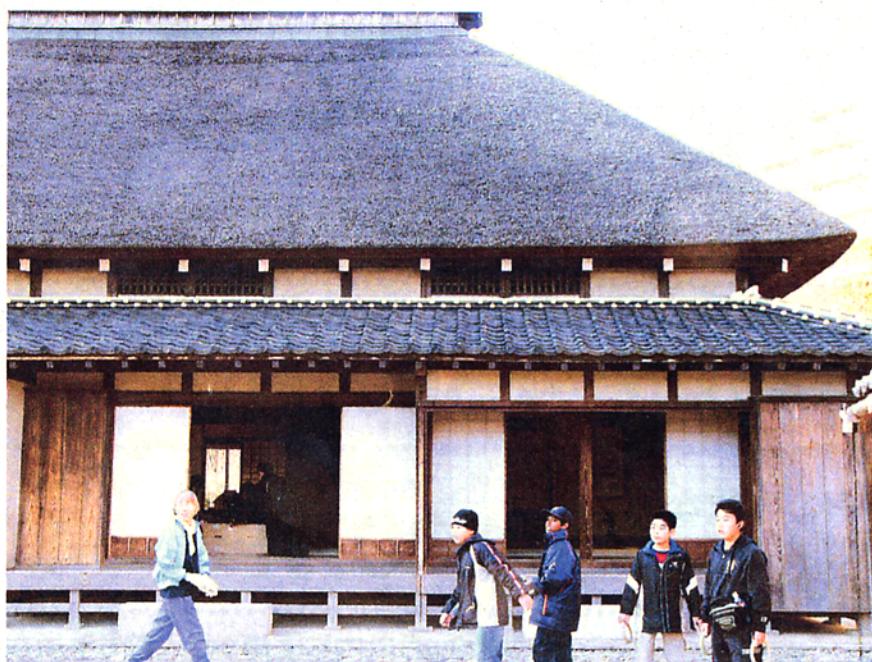
同協会は1月末、「民家再生の実例—全国事例50選」(丸善、3675円)を出版した。

日本の伝統：地域ときずな

節分や七夕、もちつき、たこ揚げ…。昔の年中行事や遊びを体験する講座を、移築した江戸後期の民家で開いているのは赤羽自然観察公園内にある北区ふるさと農家体験館(北区赤羽西)だ。

庭には13平方㍍の小さな庭があり、ナスやキュウリなど野菜作りも行う。種まき、収穫など農作業を体験し、土間のかまどでご飯を炊く。家の形だけでなく、家の中の暮らしも昔の姿を残し伝えているという狙いだ。

今年度はダイコン作りに挑戦。収穫後、軒下に干し1カ月半ほど漬けてある。ボランティアによる同館運営協議会(清水吉一会長)のメンバー、甲下静彦さん(66)は「昔は、自分の家でたくあんを漬けた。できる世代がいなくなる前に、今と思ってやっている。子供たちにも本物の味を知ってほしい」と話す。



放課後、庭で遊ぶ児童らも多い
|| 東京都北区の「ふるさと農家体験館」
|| 東京都世田谷区の「松陰コモンズ」